

子どもの発達から見たより良い屋外の遊び場づくりに関する研究

秋田大学 学生会員 ○種五 裕一
秋田大学 正 会 員 木村 一裕
秋田大学 正 会 員 日野 智
秋田大学 正 会 員 鈴木 雄

1. はじめに

子どもにとって、屋外での集団での遊びは心身の多くの面を発達させるという。しかし、現代では、さまざまな理由から、子どもたちは自由に外遊びができなくなってしまったといわれる。とくに安全や防犯性に対する意識の高まりから、保護者が子どもを安心して外で遊ばせられないといった状況がある。

本研究では、発達という視点から、現代の子供の、とくに外遊び環境について考察するものである。そのため、子供、保護者世代および祖父母世代に対して、外遊びの種類とその意義を把握するとともに、現代の遊びに必要な場の条件と有効な施策について検討する。

2. 調査の概要

現在と昔の遊びの実態、遊び場の特性、外遊びに対する認識、ニーズを把握するため、さまざまな世代の地域住民にアンケート調査を行った。アンケート調査概要を表-1 に示す。

表-1 子供の遊びに関する調査概要

対象	地域住民
配布数	600世帯に大人用アンケート2部 子ども用(小学生以下)アンケート1部 ずつ配布
回収数	祖父母世代(50代~70代以上) 167人(65.1%) 保護者世代(10代~40代) 63人(24.7%) 子ども世代(小学生以下) 26人(10.2%)
主なアンケート項目	【大人、子ども共通項目】 遊び内容、ふだんの遊び場所、遊び時間、 塾や、スポーツ教室へ通っていたか、など 【大人のための項目】 昔の遊び場の様子、子どもの遊びに対する認識 施策に対する認識

3. 外遊び実態の変化

子どもは遊びによって、「身体性」、「社会性」、「創造性」、「感性」、「挑戦・冒険性」といった面を発達させるという。この5つの発達性に関係すると思われる外遊びを設定し、大人には昔の経験、今の子供の遊びの評価と必要性について、子ども本人の実施状況を保護者にたずねた。保護者世代の認識は、どの発達性に関係する遊びも、過去の実施率が高く、現在の子供の実施率は低いと考えていること、またいずれの性質も子供にとっては必要と考えていることがわかった。その一方、子供本人の実施率に対する認識はその中間にあった。

現在の子どもの、外遊び日数を図-1 に、習い事やスポーツ教室等の頻度を図-2 に示している。外遊び日数は週1~2日もしくは遊ばないという子どもがほとんどである。習い事やスポーツ教室等をしている割合も高い。遊び場自体についてたずねた結果では、家の周りか公園などの安全で整備された所で遊ぶ子どもがほとんどであったに対し、昔の子どもは週4日以上遊ぶ子どもがほとんどで、場所も、半分以上が道路や寺、川、山などの自然といった遊び場として整備されていない所であった。

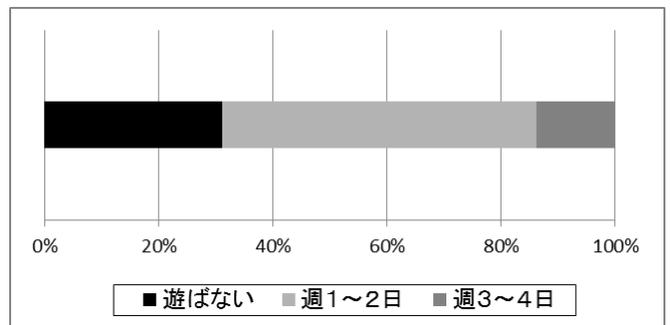


図-1 週何日外で遊ぶか

キーワード：遊び、発達、遊び場、子ども

連絡先：〒010-8502 秋田市学園町1-1、TEL(018)-889-2368、FAX(018)-889-2975

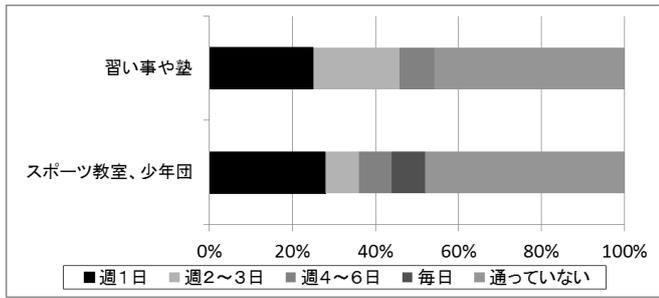


図-2 習い事、塾、スポーツ教室への通う頻度

4. 外遊びへの認識・ニーズ

保護者と、保護者を除いた20代~40代の保護者世代と、50代~70代以上の祖父母世代に、子どもの外遊びに対する意識、現状認識について質問した。その結果を図-3に示す。

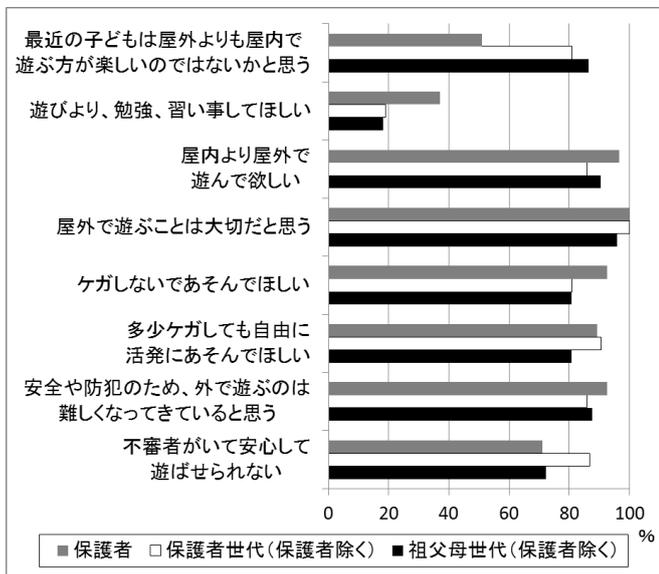


図-3 子どもの外遊びに対する認識、ニーズ

子供の遊び方については、屋外で遊ぶことなどの重要性についてはどの世代も大切なことだと考えていることがわかる。一方で、「安全や防犯のためには外で遊ぶのは難しくなっている」、「不審者がいて安心して遊ばせられない」、「今の子供は屋内で遊ぶ方が楽しいのではないと思う」という認識も持っており、現代において、遊びからさまざまなことを学ぶ場(環境)が不足していることがうかがえる。

5. 子供の遊び場の特性に対する認識

今と比べ、豊かな屋外での遊びができていた昔の遊び場では、どのように「安全性」、「防犯性」、「遊び技術の伝承」が担保されていたのかについて、現在の子どもの遊び場にそのような要素が足りているかどうかについて保護者に評価してもらった。

その結果、昔はそれほど、不審者に対する意識が

高くなく、防犯に気をつける必要はそれほどなかったこと、また、地域につながりやたまり場があったため、年上や年下の子と集団で遊ぶことが多く、年上の子が年下の子を危険、事故から守り、遊びを教えていたのではないかと考えられる。しかし、現代ではこういった要素を自然と確保するのは難しいと思われるため、環境の整備が必要である。

6. 施策の提案

昔に比べて現在の子どもができにくくなっている遊びや、安全性や防犯性、遊びの伝承の不足を補う施策の有用性について、その認識を図-4に示した。

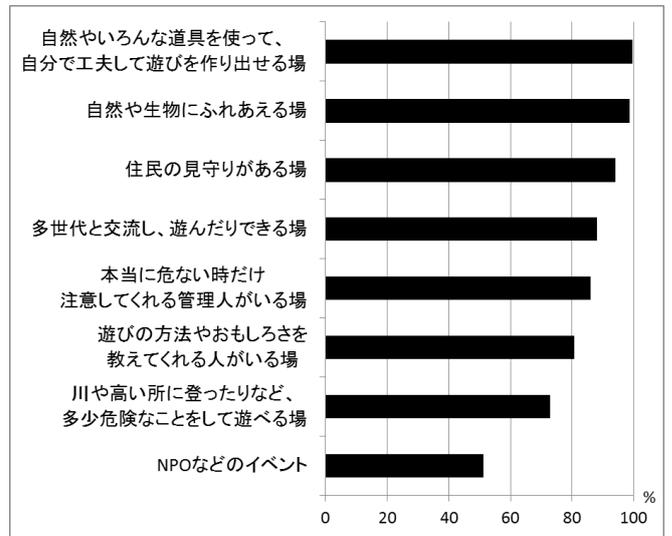


図-4 施策への認識

全体的に肯定的な意見が多く、安全性や伝承性、はほぼすべての施策に対し、よい反応があったが、NPOのイベントなどのプログラムに従い、遊べる場などがどの世代にもあまり反応が良くなかった。また、子どもの遊びにあまり大人が干渉すべきでなく、子どもの遊びは子どもに任せるべきという意見もみられた。

7. まとめ

保護者は子どもたちに、外で遊びを自由にしてほしいが、安全、防犯面のため、安心して遊ばせられないと考えていることがわかった。現代において、安全、防犯性、さらに遊びの伝承を自然に今の子どもたちが確保するのは難しいため、何らかの整備が必要だが、子どもの自発性や自由をそこなう可能性もあるため、どこまで大人が関わって整備するかは今後の課題であると思われる。